

邦訳『ニルスの不思議な旅』の系譜 その1
－初訳刊行から昭和戦争期まで－

村山朝子*

(2016年11月1日受理)

Genealogy of “*The Wonderful Adventures of Nils*”
(Japanese Translation): Part 1

Tomoko MURAYAMA *

(Accepted November 1, 2016)

I はじめに

『ニルスの不思議な旅』(Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige) (原作については以下『ニルス』と略記する)は、スウェーデンで1906年第1巻、1907年第2巻の2回に分けて刊行された。いたずら少年ニルスが魔法で小さくされ、ガチョウの背に乗ってガンの群れとともにスウェーデンを旅する物語である。動物と話ができるようになったニルスは、各地での様々な出来事を通して次第に責任感や協調性を身につけ、心優しい少年に成長し、最後には、故郷の我が家で魔法も解けて元の人間の姿に戻る。日本では長いこと、幼い子ども向けの冒険童話として捉えられてきた。

作者セルマ・ラーゲルレーヴ (Selma Lagerlöf, 1858-1940) は、スウェーデンを代表する作家の一人であり、1909年には女性として、またスウェーデン人として初めてノーベル文学賞を受賞した。『ニルス』がラーゲルレーヴの他の著作と区別されることとして、要請を受けて小学生を読者対象として創作された作品であることがあげられる。すなわち『ニルス』は、スウェーデンの国民学校教員協会の依頼によって、国民学校読本として国土理解を主目的として創作された作品である。「郷土の美しい自然を印象づけ、祖国の民であることの喜びに満たされる本を」¹⁾ という主旨に応じて、冒険の旅というストーリーの中に、国土に対する理解を深め、国や故郷に対する誇りと愛情を育む手だてが織り込まれている。

執筆にあたって、ラーゲルレーヴはまず、動物に関する専門書、地誌書等の綿密な文献調査を行うとともに、自ら南部や北部に現地調査に出向いた。教員協会は各地の教員から様々な地域情報の提供を求め、それをラーゲルレーヴに提供した。そうして伝説や昔話も取り込みながら、「事実と科学とをふまえたフィクション」という他に類をみない作品が誕生した。同作品のこうした成立の

*茨城大学教育学部社会科教育学研究室 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Laboratory of Social Studies, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan).

経緯と内容構成については、地理教育の観点から別稿で述べた（村山，2005，2011）。

『ニルス』はスウェーデンで発表されるやまたたく間に評判となり、国内のみならず、世界80カ国以上で翻訳されて（中丸，2014）、世紀を超えて今日まで、児童文学作品として広く長く読み継がれてきた。

『児童文学翻訳作品総覧第5巻』（2005）に掲げられたラーゲルレーヴ作品の翻訳総合年表によれば、日本では1905～2002年までに151冊のラーゲルレーヴ作品が発行され、その中で『ニルス』作品は66、約5分の2を占める。そのうち執筆者について「〇〇訳」とあるのは28、完訳は1作品に過ぎず、半分近い32作品は「〇〇文」とある、つまり翻訳書などをもとに短く作りかえられた再話である。さらに、同年表にも載らない絵本や雑誌に載るなどした様々な作品がある。こうした『ニルス』の翻訳状況が、「幼い子ども向けの冒険童話」という一般的なイメージを形成してきたと考えられる。

日本に初めて『ニルス』が紹介されたのは1918年である。『トム・ソーヤ』（1919）、『ハイジ』（1920）などの初邦訳の刊行と時期がほぼ重なるが、誰もが知るこれらの古典的名作とは、上述したように原作の成り立ちが異なる。そもそも英語、フランス語、ドイツ語に比べてスウェーデン語の翻訳者がはるかに少ないのに加えて、原作には日本人にはあまり馴染みのないスウェーデンの地名や歴史、地形などの話が随所に出てくる。しかも児童文学としてはかなりの長編である²⁾。こうしたことから、邦訳は部分的に訳した抄訳や全体を縮めた縮訳にとどまり、またそれらをもとに大小の改変を加えたり、わかりやすく作りかえたりした再話が数多く出回ったのである。

北欧文学者でラーゲルレーヴ研究者である中丸禎子（2010）は、ラーゲルレーヴ作品の邦訳について、「邦訳者の知名度と翻訳数のアンバランス」を指摘している。『ニルス』第1巻の初邦訳者である香川鉄蔵は、生涯にわたり完訳の刊行を目指して翻訳書を複数出版し、没後に長男の香川節によって初完訳書が刊行された。香川は「ラーゲルレーヴをライフワークとした翻訳家」の一人であり、森鷗外（『牧師』（1908））や野上彌生子（『イエスタ・ベルリング』（1921））といった「評価の定まった作家・翻訳家」と比べて「他の業績や二次文献」は少ない（中丸，2010）。日本における『ニルス』の系譜をたどるには、香川をはじめとする、文壇や翻訳史に登場しない人物や作品に注目していく必要がある。

そこで本稿は、初邦訳刊行から昭和戦争期までの『ニルス』を原作とする作品それぞれの成り立ちと特徴を明らかにするとともに、「幼い子ども向けの冒険童話」という作品像の形成過程を解明する。なお、戦後については別稿で述べる。（以下、邦訳については、単行本は『 』で、叢書類などに一作品として収録されている場合は「 」で、それぞれの邦題を示す。）

Ⅱ 香川鉄蔵と初訳『飛行一寸法師』

1) 初訳者香川鉄蔵

『ニルス』を訳して日本に最初に紹介したのは香川鉄蔵（1888-1968）である。東京生まれ、東京高等師範学校附属中学校、第一高等学校から東京帝国大学文学部哲学科に進んだ。学生時代に和辻哲郎、天野貞祐をはじめとする多くの知己を得たが、教授との学問上の意見の対立などから³⁾、

卒業を目の前にした1911年暮れに自主退学してしまった。そもそも入学して半年ほど経つと大学から遠ざかり独学に傾いていったことを、後年、和辻の妻に宛てた手紙（追悼集刊行会、1971）の中で吐露している。それでも、のちに産官学の第一人者となった学友らとの絆は固く、こののちの仕事や出版など様々な活動においても、彼らとの縁が少なからず助けになったとみられる。

1914年11月、香川は新潟県村松町（現、五泉市）を訪れた。そこで同地を拠点に伝道活動をしていたドイツ人宣教師グンデルト（Wilhelm Gundert, 1880-1971）宅にしばらく滞在することになった。グンデルトは、その父が代表を務める出版社で1905年にドイツ語訳で出版された内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』に感銘し、内村を慕って1906年来日した（上村、2005）。第一高等学校のドイツ語教師として3年間勤めた後、内村派の伝道事業に参加し、1909年6月から1915年5月まで村松町で伝道生活を送った。ちなみに香川は一高時代、日曜毎に内村の今井館に通った時期がある。

その年の12月24日、香川はグンデルトからラーゲルレーヴ作『キリスト伝説集』⁴⁾のドイツ語訳書を贈られた。翌日クリスマス当夜の集まりで、グンデルトはその中の『エジプトへ』を邦訳して集まった人々に語ったという。同集はキリストに関わる伝説を素材にした物語集で、キリストの生涯をたどるような物語が独立した話に仕立てられており、当時ドイツで愛読されつつあると香川は聞いた。これが香川のラーゲルレーヴとの最初の出会いである。香川は滞在中グンデルトからドイツ語、キリスト教も学んだという（香川、2003）。

この書に魅せられ、香川は早速その翻訳を試みるとともに、原作者ラーゲルレーヴの文学そのものに関心を寄せ、その作品や情報の収集を始めた。香川が訳出した作品は主に「家庭週報」に掲載された。「家庭週報」は、1904年6月に日本女子大学校（現、日本女子大学、1901年開校）の同窓会組織桜楓会の機関誌として創刊された。タブロイド判の新聞スタイルで、当初は隔週刊、後に週刊となった。一面は毎号のように大学校創設者である成瀬仁蔵の女子教育に関する論考が掲げられるが、二面以降は文芸のほか料理、季節の行事の設いなど生活に密着した記事が並び、女性向け啓蒙情報誌のような役割を有していたとみられる。会員は同窓生ばかりでなく、賛同会員、特別会員などからなり、執筆者には時に大隈重信、渋澤栄一など当代の名だたる知識人も名を連ねた。

「家庭週報」に香川の訳文が初めて掲載されたのは1916年3月「棕櫚の樹（369号で「椰子の樹」と改題）」で、タイトルのあとに（セルマ・ラアゲルレエフ）と記し、そのあとに「かがは」とある。同作品は、グンデルトがクリスマスに会衆に語った『キリスト伝説集』の中の『エジプトへ』である。3回（361・362・362号）にわたって連載された。「週報」に一回に掲載されるスペースは多くても一ページの3分の1程度であり、この作品に限らず、一つの作品が何回かに分けて掲載されることが多かった。ついで5月には「駒鳥」がこれも3回（366・367・368号）連続で掲載された。同作品も『キリスト伝説集』の一章を訳したもので、連載には「かがは」とあるのみだが、続く6月369号に掲載した「セルマ・ラアゲルレエフ女史」に、いずれも『キリスト物語』（原文ママ）から抜いたものであることを明記している。

その「セルマ・ラアゲルレエフ女史」（369・370・381号）には、本名「香川鉄蔵」でラーゲルレーヴの略歴や自ら訳出した作品についての解説が記され、「女史の作品のごとき美はしいそして深い、神秘的な小説や物語が日本の人に広く読まれるやうに望み、曲がりなりにも其の翻訳の続々公にされるようつとめている。また短編ものは本誌にも掲げる事が出来やうと思つて居る。」（369号）と

ある。ラーゲルレーヴの作品に出会ってからわずか1年余りしか経っていないが、彼女の作品ばかりでなく、人格そのものへの憧憬は熱狂的ともいべき凄まじさがみられる。

その言葉通り、このあとも短編の翻訳や随筆、論評等、香川による記事が毎号のように「家庭週報」に連載された⁵⁾。ラーゲルレーヴの紹介はもちろんのこと、スウェーデンに関する最新の情報を読者に知らせたいという想いが記事には溢れている。「ラアゲルレエフ女史の書いたものを愛読する私たちの間で其著書を邦訳する企画がありまして、第一着手として近く『エルサレム』の上梓を見る次第です」(369号)とある。事情は定かではないが、『エルサレム』は結局刊行までは至らなかった。香川はこの他に「婦人問題」「女性日本人」⁶⁾などの雑誌にもラーゲルレーヴの短編を訳載している(香川, 2003)。

やがて香川はドイツ語や英語訳では飽き足らず、原文でラーゲルレーヴの作品を読むためにスウェーデン語を学び始めた。当初は独学で取り組んでいたが、1918年1月からスウェーデン公使館の書記官トーレ・フェルベルの指導で本格的にスウェーデン語を学ぶようになった。8月にはフェルベルが帰国したためリュンベルゲル、次いでオクテロニーに就いて学習を続けた。

2) 初訳『飛行一寸法師』の発行(1918)

香川はいつ頃『ニルス』に出会い、その訳出に着手したのであろう。

1916年9月「家庭週報」381号には、ラーゲルレーヴの著作を入手するために奔走する様子が記されている。そこには、ギルベルト商会でドイツ語版『ラーゲルレーヴ全集』(1911)10冊中8冊を入手したことが記されている。全集に収録されないものはとりあえず英訳を取り寄せるなどしたようである。1915年ハワード(Velma Awanston Howard)による英訳が出てから、イギリスやアメリカでもラーゲルレーヴの作品が広く読まれるようになったことに触れ、既刊の英訳書を掲げている。その中に“Wonderful Adventure of Nils, Further Adventure of Nils”(1907, 1913)、すなわち『ニルス』の第1巻・第2巻の英訳本タイトルがみえる。タイトルを掲げるだけで内容に言及していないことから、この時点では洋書目録などからの情報のみで本体は未入手か、入手していたとしても未読とみられる。ともあれ『ニルス』との最初の出会いは、この英訳版であった可能性が高い。

香川初訳書(1918)の「訳者より」に、「欧文で読もうとする人のため」として『ニルス』の英仏独訳書名が掲げられている。香川はそれらは手にしていたと思われる。独訳はP.Klaiber訳“Wonderbare Reise des Kleinen Nils Holgersson mit den Wildgansen”1913年刊、とある。P.Klaiberによる初訳は1907年から1908年に3回に分けて出版されているが、当時日本で入手可能であったのはこの1913年版とみられる。英訳を入手後にこの独語版(1913)、その後スウェーデン語の原作を手に入れ、その訳出を試みたものと推察される。

1917年12月「家庭週報」446号に「セルマ・ラーゲルレーヴの『不思議な旅』」と題する香川による記事が掲載された。『ニルス』から49章「小さな屋敷」を抄訳するとともに、ラーゲルレーヴが同書を著すことになったいきさつを紹介している。文末には、邦訳が印刷中であり翌年には出版予定であることが付記されている。スウェーデン人に直接スウェーデン語を学ぶようになったのは1918年1月であるから、その前に独力で『ニルス』の翻訳を終えていたことになる。地名などが正確な読みでなかった箇所が少なくないのも独学で訳出したことの証左となろう。

1918年2月原作第1巻を邦訳した『飛行一寸法師』⁷⁾が大日本図書株式会社から刊行された。香川30歳のことである。巻末では、「セルマ・ラーゲルレーヴ女史」と題して「家庭週報」446号に

も記した、原作が誕生した経緯や作者の生い立ちについて詳述している。また旅のルートを入れたスウェーデン南部の地図が折り込みで付され、原書に一枚ある口絵が転載されている。原書初版に地図はなく、地図はドイツ語版を元に行っていると思われる。なお巻頭「訳者より」には、第2巻は分量も多いことから「地理的記事に取捨を施し『続飛行一寸法師』と題して後日出版することにした」とあり、間をおかず出版することを考えていたとみられる。

『飛行一寸法師』という、原題とは大きく異なるユニークな邦題は、一高・帝大の同窓生である佐久間鼎の命名とされる⁸⁾。出版予告を出した「家庭週報」446号には、題名について「書名を短くするためと、書店の都合で」とある。

ちなみに、この邦題とともに、原作の直訳ではない章タイトルが一つだけある。3章は原作では“VILDFAGELSLIV”，直訳すれば「野の鳥の生活」となる。ドイツ語版の“Das Leben der Wildbogel”は直訳だが、香川は3章のタイトルを「ニルスの不思議な冒険」とした。これはHowardによる英訳版“THE WONDEFUL JOURNEY OF NILS”と同じである。原作にこだわる香川が、あえてそれと異なるタイトルをあてたのはなぜであろうか。邦題は香川の意味ではなく、実はこの「ニルスの不思議な冒険」を本の題名にしたかったのかもしれない。後に自費出版した訳書の邦題は『不思議な旅』（1934）とし、その3章は「野の鳥の生活」となっている。

『飛行一寸法師』の発行部数は定かではないが、同年7月には再版印刷されている。出版元である大日本図書株式会社は、1890年文部省主導のもとに設立された教科書出版社である。それまで国が行っていた教科書出版がこの年に民間に委託されたことによる。教科書と並んで文学、哲学、心理学、動物学などの一般学術書も手がけ、翻訳ものも多数扱っていた。『飛行一寸法師』発行の2年前、同社としては異色な書籍『お話の研究』（水田、1916）が刊行されている。同書は児童のための話を扱う先駆的著作とされ、「優秀なるお話の備えるべき条件」として1.活動性、2.情緒の動き、3.空想的要素、4.絵画的印象の4つを挙げている。『ニルス』はまさに水田があげたお話の条件に当てはまる作品であったといえよう。無名の翻訳者による当時まだあまり知られていないラーゲルレーヴの著作の出版を引き受けた経緯は不明だが、水田の著作が後押しの一つになったのかもしれない。

1918年2月「家庭週報」454号の「新刊紹介」で『飛行一寸法師』が紹介されている。「原書は「瑞典教育会の依頼に依って小学校生徒の課題読本として執筆したもの」で、「何れも面白く且つ教訓的で、流石はノベル賞を得た唯一の閨秀作家の作となつてくれました。…（中略）…今回この書が香川鉄蔵氏の真摯なる態度を以て日本の言葉に訳されたことは少なくとも世の教育者の位地にある多くの母親及び一般の教育者諸氏の上ない満足に（判読不能）すべきことであろうと思ひます。」とある。

それにしても、日瑞辞書もない時代に、スウェーデン語を独学で学び始めてまだ日が浅く、訳出は困難を極めたと想像されるが、香川（1971）は当時のことを後年振り返って、次のように記している。「そのころの私がラーゲルレーヴ女史の著書を読んだ時の熱心さは、まるで恋人からの手紙を見るときにも比すべきものであった。もちろん辞書—スヴェリエ・ドイツ、またはスヴェリエ・英を用いた—を引く労ぐらいは何でもなかった。」

しかし、自然環境も文化も大きく異なる国の作品の翻訳は語学力だけでできるものではない。とりわけ『ニルス』にはスウェーデンの歴史や地理、産業、気候、動植物、風俗など様々な事柄が登

場する。長男香川節の手元に遺された鉄蔵の手作りの文法・辞書ノートや翻訳ノートは、訳出に向けての並々ならぬ意気込みを物語る。スウェーデンに関する書籍や事典、辞書などを駆使して、作品に登場する様々な事項について一から調べて理解に努めたことが翻訳ノートからもうかがえる。例えば、ノートには原作に登場する多数の鳥のスケッチ、それぞれの特性まで詳しく記されている。ラーゲルレーヴ自身、創作にあたって動植物に関する専門書や地誌書等膨大な文献を読んだことが知られるが、香川もまた彼女の苦勞に勝るとも劣らない、いわばその追体験のような作業の末の翻訳であったといえよう。

『飛行一寸法師』出版後も香川の「家庭週報」への寄稿は続いた。1919年5月517号「最近のエレン・ケイとセルマ・ラーゲルレーヴ」と題する記事はイニシャル T・K の署名であるが、香川のものと思われる。終結に向かいつつある第一次世界大戦に触れ、「人みなが戦争に酔うて…（中略）…さまざまの美名の下に戦争を賛美し謳歌した全欧州の巷」と表現している。「ちょうど原文で読んでいる『アンナ（ママ）基督の奇蹟』（1887）をラーゲルレーヴ傑作の一つと評し、続いて520、521号では「セルマ、ラーゲルレーヴと其の著作『アンテキリストの奇蹟』」と題して、ラーゲルレーヴについて改めて論評し、彼女の根本思想の崇高さについて強い筆致で論じている。

1919年12月546号には「かがは」の名で「北国よりの便り」と題して、ヨーロッパに視察に行った知人からの手紙やドイツの新聞などの内容を紹介している。ラーゲルレーヴの近年の作について「人間その者を愛するといふ精神が強くあらはれて…北欧独特の凄みを帯びた神秘が巻を通じて流れてきた」と書く一方で、「作品に年齢の影響がみえ、筆が冗長になってきたのは深く咎められない」とも評している。この頃から「家庭週報」に掲載される記事には、ラーゲルレーヴのことも世界の社会事象に関する論評が増える。そうした記事は、「かがは」、「TK」の署名で1920年暮れまでみられる。

3) 香川鉄蔵訳『不思議な旅』（1934、自費出版）

1919年7月、それまで定職をもたなかった香川は大蔵省臨時調査局の嘱託職に就き、おもに欧米の財政調査に従事することになった⁹⁾。1923年に結婚し、翌1924年長男節が誕生、翌年には長女菊香が誕生した。

初訳出版から16年後の1934年2月、香川は私家版『不思議な旅』を妻、八重子の協力を得て共著として自費出版した。10歳になった長男の節に読ませたいというのが再版の動機のひとつであり、「家庭週報」編集長を長く務めた仁科節の勧めもあったことが、巻頭「あいさつ」に記されている。

この私家版では、第1巻の固有名詞の表記をできるだけ原語発音に近いようになおしたり訳を整えたりするとともに、新たに第2巻のあらすじを「訳者のはしがき」として7頁にわたって加えた。これによって初めてストーリーとして完結した『ニルス』の全体像が示された。冒頭には「トムテについて」と題して本文にたびたび登場する妖精トムテについての注解を載せている。挿絵は初訳同様原作の口絵一枚の転載のみである。また巻末には「訳者より」と題して、「一 私どもの事」には香川自身のラーゲルレーヴとの関わりや自分の家族の事などを記し、「二 セルマ・ラアゲルレーヴ女史の事」には、初訳の巻末に掲載した彼女の生い立ちに加筆再録し写真を添えた。こうして単なる翻訳書という枠を超えて、ラーゲルレーヴについて当時最も詳しい書物になっている。200部の限定出版で知人を中心に配付したというが、配付先については明かではない。

「私どもの事」に、1924年6月10日付書簡でラーゲルレーヴから香川に対して、ある婦人から日本訳の承認を求める手紙がきたので考えを聞かせてほしい、という相談があったことが記される。香川はそれに対して次のように返答したという。「…日本語といふものは大そう多様なもので、ある一つの訳をオーソライズしたが為め他の人の優れた訳が出られなくなるとすれば実に不幸であるから女史の作品の日本訳は何人のに対しても之をオーソライズせないこと、但し何人が翻訳を求むるとも差支ないこと、換言すれば翻訳出版は何人にも自由にすることに願いたいと申し送った。」それに対する「すべてお前の申越した通りにする」といふ返事の書面を全文掲載している。

スウェーデン王立図書館が所蔵するラーゲルレーヴに関する貴重資料の中には膨大な書簡類がある。その中に1924年7月18日付け香川の書簡¹⁰⁾があり、ラーゲルレーヴの相談に対する上述の返答が英語で記されていることを確認した。なお、そこには、『ニルス』第2巻はもちろん、他の作品についても香川自身が翻訳出版する意欲が示され、日本語は表現が多様で正確な翻訳は難しいが、良質の邦訳本を少しずつでも出していきたい、と書かれている。

この書簡のやりとりに限らず、香川は初訳書をラーゲルレーヴに送付して以降、手紙による交流を四半世紀にわたって続けた。誕生日には必ずお祝いのはがきを出し、日本の風俗や美しい景色の絵葉書を探して贈るのを楽しみとした。グンデルトが著した『謡曲』（ドイツ語）や岡倉天心の『茶の本』（英文）なども送り、喜ばれたという（香川、1971）。

香川はけっして豊かとはいえない経済状況にありながらも、ラーゲルレーヴの著書や関連文献を可能な限り収集していった¹¹⁾。「一本調子に進み得る時代に、私はこうしてラーゲルレーヴ女史の作品（後にはストリントベリイの作品も）に現実の社会を忘れていた」（1971）とも書いている。

Ⅲ 大正期における英語版からの重訳

1) 「青鞥」と小林哥津子訳『不思議の旅（瑞典のお伽話）』（1919）

香川が第1巻を翻訳出版した翌1919年12月、小林哥津子（1894-1974）訳『不思議の旅（瑞典のお伽話）』¹²⁾が玄文社から出版された。原作第2巻英語版からの重訳である。杉浦非水の装幀とある。

小林は東京生まれ、父は最後の浮世絵師と言われた小林清親である。幼少期を浅草周辺で過ごし、仏英和女学校（現白百合学園）卒業後、専攻科英文科在学中に青鞥社に出入りするようになった。青鞥社は平塚らいてうと日本女子大学校同窓生らによって1911年9月同人誌「青鞥」を発刊した。小林はその頃には青鞥社の社員となって編集に携わり、同誌に「麻醉剤」（1912（2-12））を発表して以降、掲載は小説11編、ほかに詩や戯曲なども含めて22回に及ぶ。他にも同人誌「享楽」や「番紅花」の編集を手伝ったりもした（らいてう研究会、2001）。『ニルス』の訳書の他にも『赤い鳥』に掲載された小品「藁の牛」（1920）、「灯籠祭」（1920）は翻訳物である。ちなみに「藁の牛」が掲載された同誌巻末頁の玄文社広告に小林訳『不思議の旅』も掲げられ、「原著者はこれを書いてノベル賞金を貰った世界の名著である面白いうちに子供に動物を理解させる絶好のお伽話」とある。

小林は、明るく快活で気働きがきき、青鞥社では最年少であったこともあり、皆にかわいがられ

た存在であったことが、平塚や野上の手記などからうかがえる（井手，1975）。また、瀬戸内晴美が書いた平塚らいてうの伝記小説『青鞥』には、小林が青鞥社に出入りして社員となるあたりのことが記されている。「小柄できりりと小股の切れ上がったような下町娘」「一見おとなしそうに見えて、哥津はなかなかしっかきしていた」（瀬戸内，1987）とある。別のエッセイ（1982）では小林について「始終「青鞥」の編集部にて、この時代の若者のあらゆる動きを聡明な目に見つづけてきた」とも書いている。また、田村俊子の俊子忌で顔を合わせた晩年の小林について「いつまでも美しく歯切れのいい、きつ粋の江戸弁」で語ったと記している。

戦後「青鞥の思い出」と題する座談会（至文堂，1963）で、小林は当時のことを歯に衣着せぬ口調で振り返っている。「何しろ年が若いし重宝なものですから、皆さまのお使い走りをいたしまして、実際本の編集なんてもものには、わたしは算用しません。この原稿を貰ってこい、これをお届けしてこい、催促をしてこい、はいはい、というわけで、ほうぼう歩きました。おかげで明治の末から大正にかけての作家方のお顔をみることもできましたし、お話をうかがうこともできました。」

小林による翻訳出版の詳細は明らかではない。おそらく「青鞥」との関わりの中でラーゲルレーヴを知ったと推察される。1913年にはエレン・ケイの『恋愛と結婚』を平塚らいてうが訳出して「青鞥」（3巻1号，3号）に掲載した。神近市はラーゲルレーヴ原作「私生児の母」（1914）を「青鞥」とは別に自ら創刊した同人誌「番紅花」に英文から重訳し掲載するとともに、「セルマ・ラガールフ女史に就いて」としてその略歴を記している。野上彌生子は青鞥社創立メンバーに名を連ねるものの、すぐに退会し、その後は原稿を寄稿する形で「青鞥」に関わり続けた。その野上が訳したラーゲルレーヴ原作『ゲスタ・ベルリング』は、1921年「世界少年名作文学集16巻」（家庭読物刊行会）として出版された。同年その8章「グルリタ崖の大熊」は「不思議な熊」と題して雑誌「赤い鳥」6巻6号～7巻3号に連載された¹³⁾。

ラーゲルレーヴは女性として初めてノーベル文学賞を受賞した。女性解放運動にも賛同し、エレン・ケイとも親交があった。青鞥社に集う女性たちは、彼女の作品や生き方そのものに共感するところが大きかったと思われる。そうした翻訳者や作品が身近にあって、小林もまたラーゲルレーヴへの関心や翻訳への意欲をもったのではないだろうか。ただし小林自身は婦人解放、社会主義といった思想には無縁であった¹⁴⁾とみられる。

青鞥社メンバーは日本女子大学卒業生を母体としており、同大学同窓会の機関誌である「家庭週報」が彼女らの間で読まれていたとすれば、小林が手に取る機会もあったであろう。上述したように「家庭週報」にはたびたび香川によるラーゲルレーヴの短編の翻訳等が掲載された。1917年12月446号に『ニルス』を紹介した記事の最後には「英文の読める方はHowardの訳があるから読まれんことを望む」と記されている。刊行された『飛行一寸法師』の「はしがき」にも英仏独の訳書文献が付記されている。小林はこのいずれかを目にして英訳書を手に入れたのではないだろうか。小林が通っていた仏英和女学校は「半分は外国語」と、後年小林は語っており（至文堂，1963）、語学力はそこで身につけたと思われる。それにしても短期間に膨大な訳を完成させたことになる。

小林が第2巻のみを訳出したのは、すでに前年香川が第1巻を出版していたからと考えるのが自然であろう。ただし、「はしがき」では第1巻のあらすじに触れるのみで、「ここに訳しましたのは少年が丁度、これからストックホルムへ向うとするところからでありますことをお断りしてをき

ます」と記し、香川訳についての言及はない。しかし、本文中で「一寸法師」など香川が用いた特有の訳語が使われていることから、少なくとも香川訳の存在は認識していたと考えるのが妥当であろう。

小林は1914年19歳で結婚し、1915年、1917年、1920年、1922年に4男児を出産し、1934年までにさらに二男二女をもうけている。創作の発表は結婚前の1913年を中心とし、長男が誕生してからはみられない。『不思議の旅』の出版は1919年で、「赤い鳥」への掲載は1920年というように、翻訳作品の発表時期も限られている。「青鞥」の編集に関わり、自ら小説や戯曲を発表していた生活が結婚で一変し、それを振り返る間もなく家事や育児に追われていたのが、一段落したわずかな時期に翻訳作品を出したのであろうか。三男、四男は養子に出しており、やはり生活は楽ではなかったとみられ、その後も「清親の追憶」(1924)以外、創作や翻訳が発表されることはなかった。なお、戦後、落ち着いてから晩年は、父清親に関する随筆や研究紹介などを執筆している。

小林の長女、理子(1928-)は、哥津が『青鞥』の話をほとんどしなかったのは、青鞥時代に父と結婚したことやその後の子どもさんの生活を「娘の私にこぼしたり、云いわけを言いたくなかったのだと思う」と記している(小林, 2011)。

そんな哥津であったが、理子が20代の頃というから1950年代であろうか、若い頃のことを初めて聞かせてくれたという。「青鞥時代よりあと、『赤い鳥』に、母は翻訳二篇をのせてもらっている。そのほか、セルマ・ラーゲルレーヴの「ニルスの不思議な旅」を英訳からの訳一冊、それにどこにのせたのか聞きもしたが、エドガー・アラン・ポーの「赤き死の仮面」の翻訳もした、とぼつりと云った。そして、すべて年若く、今考えると赤面のいたりとも」。理子はこうも記している。「私は、母が書き残した前述の翻訳二篇とニルスの不思議の旅に固執する。母をはげまし、題材を選びか、選ばせか、おそらく手助けをして下さった、どなたかがいた筈と思う。」¹⁵⁾

2) 飯沼保次訳『鷺鳥の愛』(1923)

香川が初訳を出版した5年後の1923年4月、『鷺鳥の愛 上』(東方社)と題する『ニルス』の訳書が出ている。飯沼保次が第1巻を英文から重訳した作品である。「一言」と題したはしがきには、短く本書の成り立ちとラーゲルレーヴについて触れた上で、次のように記されている。「この名著を現今童話隆盛の時代において訳出するのは無意味では無いと信ずる。この書は英文からの重訳であるけれども、複雑した描写や、我国児童に興味の起らないような箇所は、原著者の精神のある所を損しない範囲に於て、思ひ切つて省略し、尋常二三年以上の児童が楽々読み得るやうに趣向を換いた。…(中略)…尚ほ本書は出版の都合上、上下二巻に分つことにした。下巻は近い中に必ず出版する予定であるから、もう少々の猶予を希望する次第である。」香川訳は「或る處に一人の少年があった」で始まり、基本的には主人公ニルスを表現するのに「少年」が使われている。飯沼訳は「ニルス・ホルゲルスン、こういう名の少年があった」で始まり、「ニルス」という名が使われている。なお、小林は冒頭で「ニルス・ホルゲエソンが、雁の群と一緒に旅に出た時から」とニルスの名前を出す、あとは基本的には「少年」と表現している。

飯沼が用いた「ニルス・ホルゲルスン」というニルスのフルネームは香川訳の最後に出てくる。また鷺鳥の背に乗って空からみた下界の畑を、飯沼は香川と同様に「あの弁慶稿」と表現している。こうしたことから飯沼は香川訳を読んでいたと考えられる。ただし飯沼は題名を『鷺鳥の愛』と原作名とは大きく異なる題名を付け、章タイトルについても「ニルスはどうして一寸法師

にされたか？」「ニルスはどうして狐を防いだか？」「淋しく死んだお婆さん」など、読者の関心を引くような独自の創作を加えている。

管見の限り、国立国会図書館に所蔵されている同書を確認できただけで、飯沼についての詳細は不明である。「近い中に必ず出版する予定」とした下巻についての出版の事実は見当たらない。また同書の巻末に鏡沼保次処女作長編創作『創造第一部師弟創造』近刊の予定、という広告が出ているが、これも発売の事実は確認できない。『鶯鳥の愛上』刊行の4ヶ月余りのちに関東大震災がおこっており、出版社のあった京橋月島あたりは甚大な被害を被っている。

Ⅳ 童話作家千葉省三と『ニルス』

1) 「カルと仔麩こほじかの話」(1919)：雑誌「童話」第2巻11・12号

初訳『飛行一寸法師』が世に出た頃の日本は、子ども文化の興隆期にあたる。1918年に雑誌「赤い鳥」が創刊され、その後も「金の船（金の星）」「お伽の世界」(1919)、「童話」(1920)など児童雑誌の発刊が相次ぎ、大正時代の童話文化を牽引した。翻訳作品ばかりでなく、日本人による創作児童文学もこの時期に生まれた。

小川未明、浜田広介と並んで当時活躍した創作作家の一人に千葉省三（1892 - 1975）がいる。1917年千葉は出版社のコドモ社に入り、雑誌「童話」の創刊に参画し、3年余り編集を担当しながら自ら著した作品を多数誌上に発表した。『ひろった神さま』(1920)が創作童話の処女作とされる。

1921年、千葉は「カルと仔麩の話」を雑誌「童話」第2巻11・12号に2回にわたって掲載した。これは『ニルス』第2巻冒頭第22章の再話である。連載の最後に（ラゲルレヴのものから）とある。同章は『ニルス』全章通して最も長い話で7節からなる。その中から2つの節を再構成して、幼い頃に人間に捕獲され、成長後に森に還ったおおじかと猟犬との友情、そして自然界の厳しさを描き、ニルスは登場しない。

「童話」の巻末「編集室から」には、読者からの投書欄がある。同作品についての投書が翌月第3巻1号、翌々月第3巻2号に掲載されている。それら投書にも「二日前に童話が届きました。…(中略)…お話では「カルと子麩の話」が面白く思いました。」「十二月号はほんとに面白く拝見いたしました。…(中略)…千葉先生の『カルと仔麩の話』も読んでいく中に、自然と涙が出てきました。」とあるように、味わい深い物語に仕上がっている。

香川は原作第1巻のみを訳したので、この章は取り上げていない。おそらく千葉は第2巻を重訳した小林の『不思議の旅』(1919)を参考にしたと推測される。英訳ではこの章名は“THE STORY OF KARR AND GRAYSKIN”である。小林は「犬と仔麩」と題して犬とおおじかの名は入っていないが、本文では犬をカア、おおじかをグレエスキンとしている。これに対して、千葉は本文でも犬をカルとし、おおじかの名は出さず「仔麩」としている。

千葉は『トム・ソーヤの冒険』のダイジェスト版を「二少年の冒険」と題して、雑誌「童話」第4巻4～10号(1923)に川又慶次という別名で連載している。連載中の9号に、次のような読者からの投書が掲載された。「…西條先生の『フェイヤニリイの黄金』及川又先生の『二少年の冒険』のことですが、いづれも原作者の名をのせて頂きたいと思ひます。さうすれば泰西の童話作家の

名に親しめその作品の味もいっそう深まる事と思ひます。『二少年の冒険』の方は米国のマーケットウエーンのトムソーヤーからとったのではないでせうか。最後に外国の有名な童話をますます紹介して下さる事をお願いいたします。』

これに対して編集室は「ごもっともです。此後からのものは原作者の名をいれる事にしませう。二少年の冒険はトムソーヤーの抄訳です。外国の名作も考へてゐます。今までにもずるぶん入れてきました。西條先生のなどもその一つなのです。」と答えている。連載の4年前に佐々木邦により初邦訳『トム・ソーヤー物語(1919)』が出版されている。千葉による「二少年の冒険」が佐々木訳を下敷きにしていることは松山雅子(1986)、石原剛(2008)が指摘している。

佐藤宗子(1982)は、雑誌「童話」において原作名も原作者名も明らかにされていない再話、翻案物が少なくないことについて、毎回創作ばかりを出すことが難しい執筆者側の創作事情と遠因として経済的事情をあげている。その一方で、千葉の作品を含め、外国物の再話は「雑誌『童話』にエキゾチックで、ロマンティックな雰囲気」(石井、1992)をもたせた面もあった。

千葉はこの後も創作を発表する傍ら、パーキンス(Lucy Fitch Perkins)の“The Eskimo Twins”の再話「エスキモーのふたごの話(メニーとココの冒険)」を第5巻2～8号(1924)に千葉の実名で連載している。また、滝沢馬琴の『八犬伝』をタイトル「傳奇小説八犬傳」、川又慶次のペンネームで、第5巻3号(1924)から第7巻7号(1926)に途中休載月を入れながら計24回にわたって連載している。初回には、原作者滝沢馬琴がこの大作を書き上げた苦労について触れている。なお、『雑誌「童話」復刻版別冊』(1982)は、掲載全作を物語、童謡、綴方というように区分している。その中で「カルと仔麩の話」のみ「再話」に分類され、ここにあげた「二少年の冒険」や「八犬伝」、「エスキモーのふたごの話」は「物語」に分類されている。

1923年11月、千葉はコドモ社を辞めた。その後も同誌への作品の掲載は続くが、1928年には自ら雑誌「童話文学」を創刊した。翌1929年には代表作とされる童話集『トテ馬車』(古今書院)を刊行し、郷里栃木県を舞台とした村の子どものいきいきとした姿を描いた。

2) 雑誌「幼年倶楽部」連載「ニルスノパウケン」(1939-40)

大正時代に花開いた児童文学は昭和に入って大衆児童文化として一般に普及し、昭和10年代前半に全盛期を迎えた。それを支えたのが、講談社の前身である大日本雄辯会講談社の商業雑誌である。1914年創刊の「少年倶楽部」は冒険活劇や英雄伝、漫画などを掲載し、大正時代の末あたりから部数を伸ばした。1923年には「少女倶楽部」、1926年には「幼年倶楽部」も創刊され、これら三大誌が大衆的児童文学の流行を牽引し支えた。

1932年、「少女倶楽部」10月号に千葉による「陸奥の嵐」の連載が始まった。ロシアのジュール・ベルヌの『皇帝の密使』(1876)¹⁶⁾を翻案し、時代を平安に設定し、蝦夷の反乱に京都から陸奥に送った密使の物語とした。一年間にわたって連載され、翌年には単行本として出版された。この作品を皮切りに、千葉は長編大衆小説の連載や読切を書くようになり、人気作家の一人に数えられるようになった。1935年11月「童話文学」の後継誌として「児童文学」を自ら創刊したものの、1937年にそれも廃刊し、以後大衆雑誌上に活動の場を完全に移した。

「幼年倶楽部」1939年4月号から1940年4月号にかけて一年間にわたり、千葉による「ニルスノパウケン」が連載された。この連載の前には、「母をたずねて」(加藤武雄)が1938年7月号から1939年2月号まで連載されている。また「ニルスノパウケン」の終了翌月の1940年5月号か

ら12月号には、続けて千葉がフランスのセギュール原作「ロバモノガタリ」を連載している。「ニルスノバウケン」を含め、いずれも挿絵は河目悌二が担当した。当時「幼年倶楽部」も教訓めいた話や軍国主義の色彩が強い記事の占める割合が高く、これら海外の名作の再話はきわめて異色な連載であったが、だからこそ子どもたちを夢中にさせたに違いない。

『ニルス』が採用されたいきさつは明らかではない。千葉からの提案なのか、それとも編集部から千葉への依頼なのか。少なくとも講談社は、以前からラーゲルレーヴの作品を評価していたとみられる¹⁷⁾。講談社側が『ニルス』を選んだとすれば、1934年に出された香川訳『不思議な旅』から『ニルス』が子どもを対象とする連載に適した物語として考えると、陸奥の嵐の実績があり、かつて雑誌「童話」にその一章を再話した千葉に依頼したと推測される。

一方で、千葉による提案の可能性も否定できない。千葉は、本人が繰り返し述べているように、『トム・ソーヤの冒険』『十五少年漂流記』などの作品を創作の理想とし、外国文学のダイナミックなストーリー性に魅力を感じていた（千葉、1971、1976）。前述したように雑誌「童話」では「トム・ソーヤ」や「八大伝」、「エスキモーの双子の話」などの海外作品を取り上げている。このことは「省三の中に冒険とロマンに満ちた長編児童文学を志向する側面があったことを物語って」（鳥越、1993）いる。『ニルス』はその条件を満たした理想の物語であり、香川の訳書を読んで以来、それを幼い子どもが楽しめる読み物にしたいという考えを持ち続け、連載についても千葉の方から提案した可能性もある。

仮に千葉からの提案だとしても、連載そのものは千葉が書きたかった理想からは外れたものだったかもしれない。雑誌「童話」に収録された「カルと仔麩の物語」は文芸的要素が強いものであったが、「ニルスノバウケン」はそれとは全く異なる。「幼年倶楽部」読者の中でも最も低年齢層を対象とし、カタカナ文字も一番大きなサイズが用いられ、河目の挿絵は漫画に近い。ニルスと動物たちとのやりとりを中心とする冒険を通して、いたずらな子どもが素直なよい子に成長していく様子に力点が置かれている。

「ニルスノバウケン」は連載開始早々、大人気となった。連載が始まって3ヶ月後には、東京にある遊園地豊島園に、ニルスが乗る大きな鷲鳥を形取った大型すべり台が設置された。「幼年倶楽部」9月号にはその記事が写真入りで掲載されている。出版社はその写真を添えた手紙をラーゲルレーヴに送り、連載の反響の大きさを伝えた。それに対して、ラーゲルレーヴは読者に向けた手紙で応え、10月号には彼女の手紙を訳した記事が「ラーゲルレーヴ先生からみなさんへ」（1939）と題して彼女の写真とともに掲載された¹⁸⁾。ラーゲルレーヴが亡くなる前年のことである。

社史『講談社の歩んだ50年』（講談社、1959）には、年度ごとに各雑誌の状況について短い記載がある。昭和14年（1939）については「幼年倶楽部では、ノーベル賞受賞作品「ニルスの冒険」が連載されて好評だった」とある。特定の作品についての記述は他のどの年にもなく、同連載の人氣が突出したものであったことを物語る。また社員（西村俊成）談にも「「よい子、強い子、日の丸の子」「この一線、何がなんでもやり抜くぞ」「戦い抜いて勝ち抜いて」といった標語が表紙を飾り戦時色がはつきりとでてくるなか四月号では「ニルスの冒険」というのが登場している。これはノーベル賞を取ったスエーデンのセルマ・ラーゲルレーヴ女史の書いた物で、これを千葉省三さんが日本訳して載せ始めました。」とある（講談社、1959）。

3) 世界名作童話『ニルスの冒険』（1941）

1941年5月千葉による『ニルスの冒険』が出版された。大日本雄弁会講談社はこの年「世界名作物語」と「世界名作童話」のシリーズを発刊した。『ニルスの冒険』は「世界名作童話」シリーズの『イソップ物語』（松村武雄）、『アラビヤナイト』（久米元一）に続く3冊目として出された。同書は「幼年倶楽部」の連載とは全く別作品で、小学校中学年程度を対象としている。戦後1946年8月には装丁を変えて再版され、さらに「世界名作童話」シリーズを引き継いだ「世界名作童話全集」第1期12巻の(6)『ニルスのふしぎな旅』（1950）として出版された。なお、『児童文学翻訳作品総覧』（川戸他編、2005）に掲載されたラーゲルレーヴの翻訳目録では、千葉による『ニルスの冒険』の出版年が1946年となっているが、戦前にすでに刊行されていることを現物で確認した。

同書の巻頭「まへがき」には、千葉の『ニルス』に対する思いが綴られている。まず『ニルス』は「スウェーデンの、セルマ・ラーゲルレフという、をばさんがつくられたものです」として作品の概要を記すとともに、原作を優れた作品として絶賛している。雑誌「童話」において『トムソーヤ』や『八犬伝』の再話物は原作を示さず川上慶次のペンネームを用いたのに対して、「カルと仔麩の話」は「ラゲルレフによる」と付記して本名千葉省三を使っていることから、『ニルス』について特別な思い入れがあったことがうかがえる。「まへがき」にはさらに次のようにある。

「…私はこの物語を読んだ時、まねでもよいから、私どもの日本の國を、このとほりの行き方で、書いてみようかと考へたほどでした。…（中略）…日本ではなぜか、まだあまり訳されてをりません。ひとつには、話の中に織りこまれている、スウェーデンの地理や歴史や伝説などが、日本の皆さま方には、親しみにくいためであるかもしれません。そこで、私は、本書では、あるところははぶき、あるところは書きかへして、皆さんにわかりやすいことを、主として努めてみました。それでも、原作の面白さは、十分お伝えすることが出来たとしんじてをります。…（中略）…本書は主に前篇の方によりました。したがって、まだまだ、お知らせしたい、面白いお話が、どっさり残っているわけで、そちらは、いつか又、をりを見て、お目にかけるときがあろうと存じてをります。」

関秀雄（1977）によれば、「昭和40年代の始め頃」つまり晩年、千葉は「昔ニルスのふしぎな旅を読んで、スウェーデンと同じように細長い日本列島の端から端まで、子どもが冒険旅行する話を書きたかったが、書かずじまいに終わった」と語ったという。先に述べたように、千葉は海外の冒険物語を理想としてたびたび『トムソーヤ』をあげているが、『ニルスの不思議な旅』は、それに勝るとも劣らない千葉にとって特別な物語であった。

なお、千葉は香川訳を元にしたことを明らかにしている。「まへがき」の最後に、「本書を書くにあたって、香川鐵造（ママ）先生の訳本「不思議な旅」を参考にし、狐のずる公や、鳥のあらしなどといふ訳語は、そのまま、拝借させていただきました。どうぞお許しを願ひたい存じます。16年5月1日」とある。

V 昭和戦争期までの『ニルス』像

1) 幼い子ども向けの「ニルスと動物たちとの楽しい冒険童話」という『ニルス』像

1940年代、『ニルス』を一気に世間に広めたのは、「幼年倶楽部」連載「ニルスノバウケン」、単

行本『ニルスの冒険』などIVで述べた千葉による諸作品であった。千葉は独創性の高い創作童話を執筆する文芸性と、外国作品を翻案して日本の時代読物などにして大衆児童雑誌に数多く連載する大衆性、という二面性をもっていた。千葉の全集や千葉に関する論考はこれらについて一切触れておらず、研究対象にもなっていない。しかし、千葉と大日本雄弁会講談社とによる一連の「ニルス」作品が、日本における最初の『ニルス』像を作り上げ、子どもたちに強烈な印象を残したことは紛れもない事実である。それによって少年と動物たちとの楽しい冒険童話という邦訳『ニルス』の大衆童話化、主人公ニルスの幼年化が定着したといえる。

一方で、戦意高揚を目的とする読み物や記事が増えていく中、時流に全く関わりのない明るく元気な『ニルス』の物語は、道徳性や教訓性を超えて子どもたちの心を夢で満たすものであったに違いない。とくに最大の読者を得た「幼年倶楽部」の一年間にわたる連載「ニルスノバウケン」は、後のテレビアニメ「ニルスのふしぎな旅」への子どもたちの熱中に通じるものがあったのかもしれない。

児童文化研究家の上笙一郎（1933-2015）は、関東地方の山村の貧しい家の子どもの本や雑誌などなかなか買ってもらえなかったが、「その貧しい読書体験のなかに印象深く残っている童話のひとつが、雑誌「幼年倶楽部」に連載されていた「ニルスノバウケン」（上、1988）と記している。当時小学校2年生であったという。

翻訳家の深町真理子（1931-）は、好きな子ども時代に印象に残った作品として「青い鳥」「ピーターパン」「フランダースの犬」をはじめとする誰もが知る名作とともに「ニルスのふしぎな旅」をあげている。本を買えるのは月に1回程度母を本屋に連れて行って自分が選んだ本を1冊だけ、あとは友達に借りたりしたという。とすれば、これらは当時比較的手に入りやすかった大日本雄弁会講談社のシリーズであろうか。『ニルス』について深町（1999）は次のように記す。

「あらためて大人になってから読みなおし、はじめてこれが、戦前読んだころには完訳の形では出ていず、内容もスウェーデンの歴史や地理をおもしろく紹介し、あわせて自然保護を訴えることを目的としたものであると知った。とはいえ、それはあくまで読んだうえでのこと。読者は、鷲鳥に乗ったニルスに導かれるままに、各地の風物に触れ、彼の冒険に手に汗を握ればいいのだし、またそれこそが正しい読みかたではないかと思う。」

2) 大江健三郎と『ニルス』

大江健三郎（1935 -）は1994年ノーベル文学賞を受賞した際、現地での受賞記念講演「あいまいな日本の私」の冒頭で、少年期に出会った『ニルス』について言及している。

「それは不幸な先の大戦のさなかでしたが、ここから遙かに遠い日本列島の、四国という島の森のなかで過ごした少年期に、私が心底魅惑された二冊の書物がありました。「ハックルベリー・フィンの冒険」と「ニルスの不思議な旅」。」

この2作品について、大江はその後の対談やエッセイなどでもたびたび取り上げている。ある対談で、大江は作品との出会いについて次のように語っている（小澤、2008）。

「ぼくの母は、これは本当に大切だと思う本をちゃんと見つけてきて、いつの間にか僕の周りに置いておいてくれるという人でした。ぼくの子どものころというのは戦争中で、しかも四国の田舎ですから、本などそう簡単に手に入らなかった。そうした困難な時期に母親が見つけてきたのが『ニルス・ホーゲルソンの不思議な旅』と『ハックルベリー・フィンの冒険』という二冊の本で、この

二冊は、ぼくに本を読むこと、人生を生きることの幸福を見つけさせてくれた本です。」

『ハックルベリー・フィン』の入手については、同書に関する別のインタビューで次のように述べている（石原，2008）。

「ある日、私の母は朝早く起きて、1kgの米を携え（中略）森を通って小さな町まで行きました。非常に夜遅く、母は帰ってきました。お土産に妹には小さな人形を、弟にはお菓子を、そして私には2冊の文庫本をくれたのです。第1巻、第2巻という具合に。それはマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン』でした。（中略）母はいいました。「この本が子どもにとっても大人にとっても最高の小説だ。そうあなたのお父さんがいっていたのよ。」

大江の父は1944年11月に亡くなっているのです、そのあと終戦前に入手したことになる。この時『ニルス』も入手したのかどうかは定かではないが、先の対談で『『ハックルベリー』はよく知られていましたが、『ニルス』のほうは当時の日本で有名ではなく、なぜ母親が読ませようと思ったのか。これは、ぼくの人生の中でも一番の不思議です。」（小澤，2008）とも述べている。

そもそも大江が幼い頃に読んだのはどの本なのだろうか。大江は『ハックルベリー』について「私がこの翻訳をはじめて読んだのは十歳より前だったことがはっきりしている」（大江，2001）とした上で、「私をもっとも永く愛読した、以前の岩波文庫版のこの一節の訳では—そして私はいま自分が子供の時はじめて出会ったのがこの中村為治訳だった、とも考えているのだが、それはまちがいでしょうか？—（以下略）」（大江，2001）と、曖昧な記憶として中村訳をあげている¹⁹⁾。

一方、『ニルス』については管見の限り、特定の作品名は確認できない。大江は地元の大瀬中学校を卒業後、1950年隣町の内子高校に進学するが、2年進級時に松山東高校に転校する。松山の図書室でこの2冊の英訳版に出会い、幼い頃読んでほとんど丸ごと暗記していた邦訳とその英訳とを照合しながら今一度読み返す。ここで、母に与えられて自分が幼い頃読んだ『ニルス』が再話であったことを知る。「セルマ・ラーゲルレーヴの邦訳はじつに大量に省略しているある版だったことがすぐわかったが、それでも欠けたところは辞書を引ながら読み進むことができた。」（大江，2001）。このことから、大江が幼い頃に出会った『ニルス』は、おそらく千葉省三による『ニルスの冒険』（1941）であったと推測される。松山東高校時代には、後述する香川他訳（1949）が刊行されているので、英訳を読んだあとでそれを読み直した可能性はあるが、確証はない。

ノーベル文学賞の受賞記念講演（1994）で、大江は『ニルス』の物語に「幾つものレヴェルの喜び」を得たと語る。一つには「小さな島の深い森に閉じ込められて暮らす少年に、本当の世界は、またそこに生きるということは、このように解放されたものだという、みずみずしく不逞な確信を与えられた」と述べた。二つには、旅を通じて「いたずら坊主の性格を改造し、無垢な、しかも自信に満ちた謙虚さをかちえて」ゆくその過程に寄り添う喜び。そして最上のレヴェルの喜びは、帰郷したニルスが懐かしい家の両親に呼びかける、次の言葉にあったという。

「かれは叫んだ、お母さん、お父さん、僕は大きくなりました、もう一度、人間に戻って！」その「もう一度」という言葉に、自分もまた浄められ高められる感情を味わいえたというのだ。

この体験は事実だとしても、それが四国の山奥で最初に出会って語んじるほど読み込んだ本とは限らないだろう。仮に最初に読んだのが千葉訳だとしたら、千葉訳にこのセリフは登場しない。松山東高校時代に図書室で読んだ英語版だとしたら、そこでは“again”，「もう一度」であった²⁰⁾。

大学に入って仏文科に進んだ大江は、仏訳でこれを確認めた（大江，2004）。英訳では again と

いうだけの「もう一度」が、仏訳では *de nouveau*、つまり「もう一度」「新しく」という意味合いを含んだ語があてられていた。そこで大江は、自分自身が、当時森の子供が、「新しく」という響き聞き取ってニルスの喜びを共有したから、それが最上の喜びであったことを確信したのだという。そして、その後の人生において、大江はしばしば「この叫び声を繰り返してきた」と述べている。

ノーベル文学賞の受賞記念講演は、十歳前の幼い時期に四国の山の中で『ニルス』に出会ってから、松山の高校での英語版を経て、大学でフランス語版を手にするまでの10年間を、時間軸を捨象して再構成した話とすれば、腑に落ちる。

大江が「もう一度」に「新しく」という意味合いを感じ取った邦訳書がいずれかということについて確証はつかめないが、その書物が存在していたことはまちがいない。いずれにせよ、大江の母が最初に『ニルス』本を入手した経緯は今となっては謎のままである。

VI まとめ

1918年の初邦訳から今日に至るまで、日本では『ニルス』を原作とする様々な訳書や作品が生み出されてきた。原作はスウェーデンの国土理解を主目的とした、諸科学の成果と事実とをベースにしたフィクションという特殊な作品で、しかも他に類を見ない長編である。明治・大正期の翻訳児童文学は、著名な作家が創作を発表する傍ら、欧米作品の翻訳を手掛けるのが主流であった。しかし『ニルス』の第1巻初邦訳は文学界では無名の香川鉄蔵によるもので、続く小林哥津による第2巻重訳やその後香川が出した私家版も含め、これらの翻訳書は広く流布することはなかった。

1939年、童話作家の千葉省三による再話「ニルスノバウケン」の連載が幼年向け雑誌に一年間にわたって連載されて大変な人気を博し、これによって「幼い子ども向けの冒険童話」という作品像が一気に広まった。1941年には、千葉が香川訳をもとにして小学生向けに著した『ニルスの冒険』が出版され、動物たちとの様々な出来事を通した少年の心の成長を通底するテーマとした「少年ニルスと動物との楽しい冒険童話」という作品像が定着し、これが戦後の『ニルス』作品像にまで長く影響することになった。

注

- 1) 鈴木徹郎は、『児童文学事典』（1988）の「北欧児童文学の項」で、スウェーデンの近代の児童文学について、当時の教育動向と関連させて述べている。そのなかで『ニルス』についても言及し、作者ラーゲルレーヴが、「単に各地の自然を羅列するのみのモザイク的作品ではなく、正確な知識と想像力を駆使して、現実の環境と人を描きつつ、歴史を底に秘めたサガや歌を語り、動物や自然の保護にまで触れることによって、郷土ロマン主義（新ロマン主義）の伝統をみごとに開花させる文学作品にまとめあげた」と評価している。
- 2) 原書第1・2巻合わせて680ページ。「全訳すると、400字づめ原稿用紙で2千まいをこす」と山室は記す（1995）。
- 3) 主任教授の元良勇次郎教授（1858-1912）は日本最初の心理学者とされる。香川は元良教授には心服したが、

井上哲次郎教授（1856-1944）とは意見が合わず、それが自主退学の主たる理由とされる。井上哲次郎は、東京帝国大学最初の哲学教授で、国家主義の立場からキリスト教を批判し、内村鑑三の不敬事件で内村を激しく非難した。

- 4) 1905年に小内薫がその中の「わが主とペトロ聖者」を「彼得の母」と題して訳出したのが、初邦訳とみられる。香川が「家庭週報」に訳載した他、戦後多くの翻訳が複数の訳者によって出され、絵本にもなっている。イシガオサムは1938年にラーゲルレーヴに直接翻訳の許可をとり、「ベツレヘムの子ら」を訳出してローマ字で著した（Betulehemu no Osanago）。イシガは香川と並ぶ「ラーゲルレーヴをライフワークとした翻訳家」（中丸、2010）で、のちに戦後11篇を収めた『キリスト伝説集』（1955）を岩波文庫から出版した。香川が訳出した「棕櫚の樹」は「エジプトくだり」、同じく「駒鳥」は「むねあかどり」として収載されている。
- 5) 「家庭週報」に1916～1920年に、かがは、香川鉄蔵の名で掲載された作品、記事には、以下のものがある（号数）。「棕櫚の樹」（361 - 363）、「駒鳥」（366 - 368）、「セルマ・ラアゲルレエフ女史」（香川鉄蔵、369・370, 381）、「バアーシキールテュフ嬢」（375）、「勇士エゴリとジブスイ」（393, 394）, 以上1916年。「銀山ラーイエルレーヴ女史の短編」（406 - 411, 413, 414）, 「レオルの物語」（425 - 427）, 「風船」（434 - 441）, 「セルマ・ラーゲルレーヴの「不思議な旅」（446）, 以上1917年。1918年に「短夜雑話」（471, 472）。「最近のエレン・ケイとセルマ・ラーゲルレーヴ」（T・K, 517）「セルマ、ラーゲルレーヴと其の著作『アンテキリストの奇蹟』」（520, 521）「一生懸命の人たち」（545, 546）, 「北国よりの便り」（546）, 以上1919年。「日本を去る五百の子供よ」（554, 555）, 「新独逸の婦人」（557, 558）, 「エレン・ケイ女史の傳」（577）, 「おもいで エレンケイ古稀の祝ひに（セルマ・ラーゲルレーヴ）」（無記名, 579）, 「ダンテ研究の新生面」（581）, 「巨匠ツオールン」（587）, 以上1920年。なお無記名については、その内容から香川のものと同推測されるものである。
- 6) 「女性日本人」（1922）に「或る子供たち」, 「或る子供たち」3巻4号, 「或る母へ（ドスドイエフスキー）」3巻5号など。
- 7) 表紙には鳥に囲まれて空を舞う少年の姿が描かれている。1907年アメリカで英訳出版された第1巻のMary Hamilton Fryeによる挿絵の一部を利用したとみられる。
- 8) 佐久間（1888-1970）は、前述の刊行には至らなかった『エルサレム』を共訳した一人である。香川と同じ東京帝国大学哲学科心理学を修め、大学院に進み、ドイツ留学後九州帝国大学初代心理学の教授となる。スウェーデン語の名前などの読みについて相談したりもしている。
- 9) 卒業直前に自主退学して大学卒の学歴ではなかったため、正式な任官はかなわず、最後まで嘱託であった。
- 10) 王立図書館貴重資料室に所蔵される書簡類は差出人別に整理されている。1924年7月18日付香川鉄蔵からラーゲルレーヴに宛てた書簡（Tetsuzo Kagawa, 246-250）。
- 11) 香川が収集したラーゲルレーヴやスウェーデンに関する書籍の一部228冊は法政大学に寄贈され、セルマ・ラーゲルレーヴ文庫として多摩図書館に所蔵されている。ラーゲルレーヴの著作だけでなくエレン・ケイやスノワルスキー Carl Snoilsky の著作、スウェーデンの歴史、経済、地方誌など多岐にわたる。刊行年をみると1950年代のものも多数あり、晩年もスウェーデンに対する探究心は衰えることなく盛んであったことがうかがえる。ラーゲルレーヴ生誕百年の1958年発行の書籍が多数ある。この年招待を受けてスウェーデンを訪問した際、大量に収集するとともに、招待者側からラーゲルレーヴ関係の書籍の贈呈も受けている。

- 12) 同書では哥津子とあるが、「青鞥」における作品や青鞥に関する書籍のなかでは哥津と記されているものが多い。
- 13) 小林は1914年結婚後も青鞥社のメンバーとの交流は続いており、とくに野上彌生子とは個人的に交流を続けていた。野上を研究する小野由紀は、むしろ野上が『ゲスト・ベルリング』を訳した背景として哥津子の影響があったと推察している（小野，2003）。
- 14) 小林は「青鞥の思い出」と題した座談会で次のように発言している。「やはり婦人の地位解放などということのおいはしてはいましたね。ですけれども、わたくしなんかは子供ですから、全然わかりません。それはもう、女の人の方が手を振って男と並んで、悪口をいわれないですむような時代がくればいいとおもいましたけれども、こようとも思いませんし、それをこさせようとする運動の中に自分があるんだ、なんてことはひとつも思っておりませんでした。」
- 15) 瀬戸内が書いた『青鞥』（1987）には、哥津が『青鞥』の出版元を引き受けた東雲堂の主人西村陽吉と親しくなり、「二人とも、江戸っ子の下町っ子なので気があったし、都会人らしいデリケートな神経の遣い方も似ていた」と記し、西村は実務家としての面もあれば、自ら文芸雑誌を発行し、歌や詩を書いている、ともある。理子はこのことから「手助けをして下さった」のは西村であろうかと推測している（2011）。先にあげた座談会で、小林は西村について「うた読みと自分は称しているけれどもどういうものですかね。」「そろばんをはじいて、なかなかしっかりした人間でした。やはり計算に合わなければいけない人です。」と語っている。
- 16) 初邦訳は1987年報知新聞に連載された森田思軒（ペンネーム羊角山人）訳「盲目使者」。
- 17) 王立図書館に所蔵されたラーゲルレーヴ書簡の中に、大日本雄辯会講談社からラーゲルレーヴに宛てて書簡がある。雑誌「キング」は世界の著名人に対するアンケートを企画し、1935年9月23日付けでラーゲルレーヴにアンケート調査の依頼文書を出している。
- 18) 王立図書館に所蔵されたラーゲルレーヴ書簡によれば、1939年6月28日付け差出人幼年倶楽部編集長で、日本でニルスが大人気で子どもたちから投書が多数寄せられていることを伝え、講談社が東京郊外の遊園地にガチョウに乗ったニルス像（滑り台）を建設し完成間近であるとして、写真を送っている。そして子どもたちにメッセージをいただけないかと依頼をしている。これを受けてラーゲルレーヴは手紙を書き、それを訳したものが、子どもたちが完成した滑り台に乗った写真とともに雑誌に掲載された。
- 19) マーク・トウェインの研究者である石原剛によれば、『ハックルベリー』については、1941年2月に出版された中村為治訳による岩波文庫版であることを大江自身が語っている（石原，2008）とあるが、このことを根拠としているのかは不明。
- 20) スウェーデン語では“igen”。“Mon och får jag ar stor, jag ar manniska igen!”。小林訳（1919）では「お父さん、お母さん、僕は大きな子供になりましたよう。又人間になれましたよう。」、香川訳（1934）では「ニルスは叫んだ、「お父さん、お母さん、僕は大きくなった。また人間になった！」」となっている。戦後の香川他訳（1949）では「お父さん、お母さん、ほくもと通り大きくなれたんだね！ほく、もと通り人間になれたんだね！」となっており、「もう一度」という邦訳は存在しない。

引用文献

飯沼保次 / 訳. 1923. 『鶯鳥の愛上』（東方社）.

- 石井光恵. 1992. 「雑誌『童話』に関する研究Ⅳ－『童話』1921年4月号～1922年3月号と千葉県三－」日本女子大学紀要家政学部 39,53-60.
- 石原剛. 2008. 『マーク・トウェインと日本 変貌するアメリカの象徴』(彩流社).
- 井手文子. 1975. 『『青鞥』の女たち』(海燕書房).
- 小澤征良. 2008. 『言葉のミルフィーユ』(文化出版局).
- 小野由紀. 2003. 「野上彌生子の翻訳研究－「不思議な熊」(ラーゲルレーヴ作)の一考察」梅花児童文学 11,81-89.
- 大江健三郎. 1994. 「あいまいな日本の私 ノーベル賞記念講演の全文」日本経済新聞 1994.12.9.
- 大江健三郎. 2001. 『私という小説家の作り方』(新潮社). 34-36,39.
- 大江健三郎. 2004. 「伝える言葉」朝日新聞 2004.6.8.
- 香川鉄蔵 / 訳. 1918. 『飛行一寸法師』(大日本図書).
- 香川鉄蔵・八重子 / 共訳. 1934. 『不思議な旅』(非売品).
- 香川鉄蔵. 1971. 「ラーゲルレーヴと私」高橋健二他編『ノーベル賞文学全集 18 ラーゲルレーヴ メーテルリンク ヒメネス』(主婦の友社). 月報 11,7-8.
- 香川鉄蔵先生追悼集刊行会編. 1971. 追悼集『香川鉄蔵』(非売品).
- 香川節. 2003. 「父香川鉄蔵のこと」植民地文化研究 2,143-147.
- 上笙一郎. 1988. 『児童文化書書遊』(出版ニュース社). 144.
- 神近市 / 訳. 1914. 「私生児の母」番紅花 1 (5), 192-204.
- 神近いち. 1914. 「セルマ・ラガールーフ女史に就いて」番紅花 1 (5), 205-207.
- 上村直己. 2005. 「熊本大学第五高等学校外国人教師履歴：附録」. 162-163.
- 川戸道昭他編. 2005. 『児童文学翻訳作品総覧第5巻北欧・南欧編』(大空社). 414-441.
- 講談社社史編集委員会編. 1959. 『講談社の歩んだ五十年』(講談社). 428.
- 小林哥津 / 訳. 1919. 『不思議の旅(瑞典のお伽話)』(玄文社).
- 小林哥津. 1920a. 「藁の牛」. 赤い鳥 5 (3), 28-33.
- 小林哥津. 1920b. 「灯籠祭」. 赤い鳥 5 (6), 70-77.
- 小林理子. 2011. 「母、小林哥津のこと」いしゅたる 10,18-19.
- 佐藤宗子. 1982. 「雑誌「童話」の再話について」『雑誌「童話」復刻版別冊』(岩崎書店). 60-67.
- 児童文学翻訳大事典編集委員会編. 2007. 『図説児童文学翻訳大事典第1巻』(大空社). 212-215.
- 柴野民三他編. 1982. 『雑誌「童話」復刻版別冊《解説・執筆者一覧》』(岩崎書店).
- 至文堂. 1963. 「座談会「青鞥の思い出」国文学解釈と鑑賞 9,106-133.
- 鈴木徹郎. 1988. 「北欧児童文学」『児童文学事典』(東京書籍). 914-918.
- 関秀雄. 1977. 「解説 - 童心主義文学の光と影」『日本児童文学大系第15巻千葉県三集』(ほるぷ出版). 405-429.
- 瀬戸内寂聴. 1982. 『遠い風近い風』(文春文庫). 72.
- 瀬戸内寂聴. 1987. 『青鞥』(中公文庫). 319-320.
- 大日本雄辯会講談社. 1939-1940. 『幼年倶楽部』14 (4) -15 (4).
- 千葉県三. 1921. 「カルと仔麩の話」童話 2 (11), 78-87, 2 (12), 80-85.
- 千葉県三. 1941. 『ニルスの冒険』(大日本雄辯会講談社).
- 千葉県三. 1971. 『千葉県三童話全集第1巻』(岩崎書店). 付録月報 1.

- 千葉省三. 1976. 「あのこと」鳥越信等編『新選日本児童文学①大正編』（小峰書店）. 355-358.
- 中丸禎子. 2010. 「日本における北欧受容 - セルマ・ラーゲルレーヴを中心に」北ヨーロッパ研究 6,51-60.
- 中丸禎子. 2014. 「『ニルスのふしぎな旅』におけるスウェーデンの近代化とセルマ・ラーゲルレーヴの国家観」
日本児童文学学会例会 (http://www7b.biglobe.ne.jp/nakamaru_teiko/pdf/nils.2014.pdf).
- 深町真理子. 1999. 『翻訳者の仕事部屋』（飛鳥新社）. 74. （初出 1988 年 3 月 27 日サンケイ新聞）.
- 松山雅子. 1986. 『宮沢賢治 千葉省三』（大日本図書）. 230.
- 水田光. 1916. 『お話の研究』（大日本図書）.
- 村山朝子. 2005. 『「ニルス」に学ぶ地理教育 - 環境社会スウェーデンの原点 -』（ナカニシヤ出版）.
- 村山朝子. 2011. 「地理読本『ニルスの不思議な旅』の成り立ち」茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）
60,21-41.
- 矢勝勝美編. 1992. 『大日本図書百年史』（大日本図書）.
- 山室静 / 訳. 1995. 『ニルスのふしぎな旅』（講談社）. 292.
- らいてう研究会編. 2001. 『『青鞥』人物事典 110 人の群像』（大修館書店）. 92-93.
- Lagerlof.S. 1906. *Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*. Forsta Bandet. Albert Bonniers.
- Lagerlof.S. 1907. *Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*. Andra Bandet. Albert Bonniers.